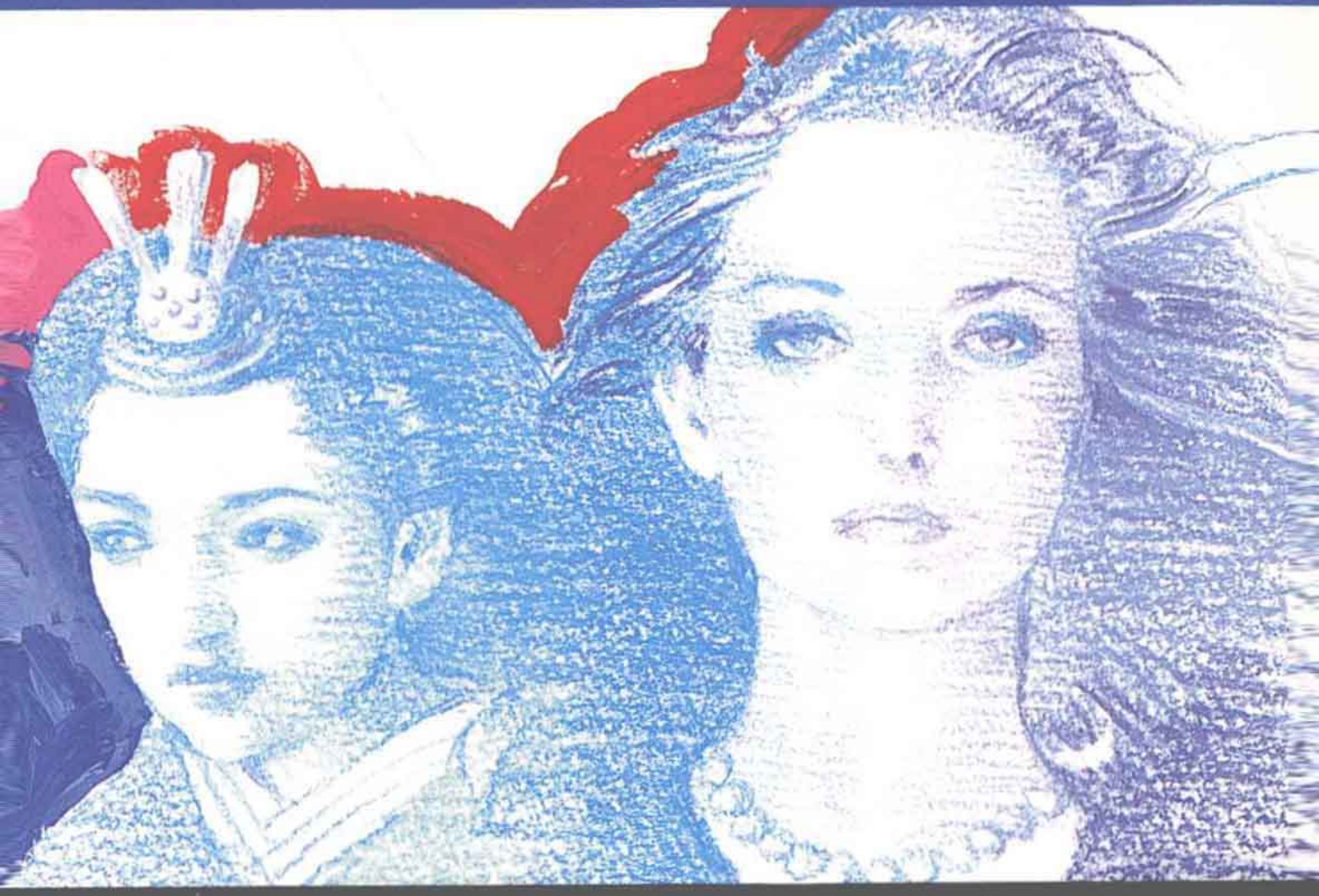
内田康夫

Yasuo Uchida

斎王の葬列



角川文庫

斎王の葬列

内田康夫

角川文庫　10352

平成九年五月二十五日　初版発行

発行者——角川歴彦
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部（〇三）三二三八—八四五一
営業部（〇三）三二三八—八五二一
〒一〇二　振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——多摩文庫
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Yasuo UCHIDA 1993　Printed in Japan

う 1-37　ISBN4-04-160738-8　C0193

斎王の葬列

内田康夫

角川文庫 10352

目次

プロローグ　七
第一章　流され皇女の陵　一四
第二章　水漬く屍　五四
第三章　御古址の祟り　八八
第四章　天は怒りて　一三三
第五章　人形代の謎　一六四
第六章　びわこ空港建設計画　二〇六
第七章　あやしい被害者　二五一
第八章　破局の真相　二八八
第九章　因果はめぐる　三三〇
エピローグ　三六〇
自作解説　三六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世にふればまたも越えけり鈴鹿山
昔の今になるにやあるらん

斎宮女御

プロローグ

野元末治が「御古址」の森で無惨な死に方をした夜は、夜半過ぎてからほんの短い時間、鈴鹿山系特有の叩きつけるような雨が降った。雨は未明には上がり、翌朝は雲一つない日本晴れになった。

この日、東京では皇太子のご成婚が行なわれ、日本中がその話題で持ちきりであった。午前十時から賢所で結婚の儀が、午後二時三十分からはパレードが行なわれ、その模様はテレビでも中継された。皇太子ご夫妻を乗せた六頭立ての馬車が、沿道を埋めた大観衆の歓呼の中を進む光景は、戦後の苦難が終わりを告げ、新しい日本のスタートを象徴するように、美しくも華やかなものであった。

野元末治の死体は、テレビ中継が始まる寸前、御古址の近くで茶畑を栽培する農家の夫婦が発見した。

発見された時、末治は雨に打たれ、泥の飛沫を浴びて黒く染まっていた。仰向けになった顔の額から上の右半分は、コンクリート塊の一撃をくってザクロのように無惨に潰され、血漿とも脳味噌とも判別できない、白茶けた粘液状のものが、黒い地面にドロリと垂れて

いた。

不気味なことに、末治のカッと見開いたままの眼窩の上を、甲羅の赤黒い沢ガニがモソモソと這っている。茨のとげのように尖った足が黒目の上を歩いたときは、夫婦は思わず目を閉じた。

夫婦の知らせで駐在が駆けつけたが、それより先に、近隣から野次馬が集まって、死体を取り囲んでいた。

死体の脇には「凶器」となった鳥居の残骸が転がっていた。以前から老朽化を指摘されたまま放置してあったのが、何かのショックで倒壊したのだろう。昨夜は雷も鳴っていたから、ひょっとするとそれが原因かもしれない。その下にたまたま末治がいあわせたのは不運としか言いようがないが、野次馬の後ろのほうから覗き込んでいた老人は「御古址の祟りや」と、恐ろしげに呟いた。御古址は一木一草たりとも冒してはならないのが、いにしえからの定めであるのに、その禁を破ったから、罰が当たったにちがいないというのである。

みんなも頷いて、寒そうに首をすくめながら御古址の森を見回した。

たしかに、御古址は神聖な場所であると同時に、恐ろしい怨念の満ちている空間だという言い伝えは、ずっと昔からこの土地にはあった。その事実を証明する古文書のたぐいはないのだが、ことし九十二歳になる古老に聞いたところによると、彼がまだ子供のころ、祖父から祟りの話を聞いたといい、その祖父もまた祖父から聞いた話として古老に伝えた

そうだから、どれほどの昔なのか、見当もつかない。

戦後の混乱期に、御古址の檜（ひのき）を盗伐した男が、それから半月後に狂い死にしたことがあるそうだ。

そういうことがあるから、町の人間は御古址にはなるべく近寄らないようにしている。鳥居が古くなって危険だと分かっていても、なかなか修復しようとしなかったのは、そういう理由からだ。

御古址に小さな拝殿を設けて、祟りを鎮めようとした際も、基礎のための穴を掘ることを遠慮して、地上にコンクリートの土台を作り、そこに柱を立てるほどの気の遣いようだったのである。

末治が何の目的で御古址に侵入したのかは、推測するしかなかったが、中に「賽銭（さいせん）ドロをしとったんや」と決めつける者もあった。カニを賽銭箱の中に垂らして小銭を拾い上げるのは、末治にかぎらず、近隣の者なら、子供のころよく、遊び半分にやった賽銭泥棒の初歩的な技術である。

「末治は、そんなあほなことはせんがな」

末治の父親が遺体をかばうようにして、悲痛な叫びで抗議したが、「そしたら、カニのことはどう説明するんや」と言われて、沈黙するほかはなかった。沢に棲（す）むカニがここまで上がってくるとは思えなかったし、第一、カニは赤い糸で腹を結ばれ、糸の一方の端が末治の体の下にあったのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

末治がときどき御古址の拝殿の中にもぐり込んでいることも、この近くでは知らない者はない。しかもその前の日の午後、末治が野洲川の支流の沢でカニを取っているところと、夕方近くに、御古址へつづく道を歩いて行くのが目撃されていた。だから、二日つづけて、賽銭泥棒を目的に、御古址の拝殿に出掛けたと考えられた。

さらに末治にとって不利だったのは、彼の遺体から少し離れたところの地面が、ほかと違う様相を呈していて、明らかに掘り返した形跡が見られたことだ。

付近にはシャベルも鍬も見当たらなかったから、その夜の作業ではないらしいが、いずれにしても、ごく最近、地面を掘ったことは間違いない。となると、末治は何か盗掘をしていた疑いもある。

御古址の森には斎王の時代に宝物類が埋められた――という伝説めいた噂は、かなり昔からあったそうだ。いや、じつは宝物ではなく、埋められているのは、旅の途中で亡くなった斎王の亡骸だという説もある。御古址の杜が当時のまま残されているのは、ここが斎王の皇女の御陵で、冒瀆したり侵害したりすると祟りが下されるから、誰も恐れて手をつけなかったためだ――というのである。

末治はその禁を破って御古址の杜を掘り、宝物を探していたのではないか。そのために罰が下ったのではないか――と、まことしやかに噂された。

とはいえ、野元末治は二十五歳になる一人前の男だ。常識で考えれば、効率の悪い賽銭ドロなど――と、ふつうなら首をひねりたくなるところだが、日頃から奇行の多い末治の

ことだから、常識だけでは推し量れないという説もなくはなかった。

末治は子供のころから一風変わった、まあ一種の困り者として扱われていた。と言っても、べつに頭が悪いわけではない。それどころか、幼いころから利発で、学校の成績はいつもトップクラス。

ろくすっぽ勉強もしないで、教師も驚くほどの成績を上げるから、自然、他人を見くびるようになる。しかし、本来の勉強をしていないために、ふつうなら何でもない、基礎知識に欠けていて、テストの結果が信じられないような低い点になって現れたりもする。そのことを家族が指摘すると、末治は「ふん」と鼻先で笑って、「わざと間違えてやったんや」とうそぶいた。「あんまりいい点を取ると、妬(ねた)まれるさかい」と言うのである。これには、さすがの両親たちも二の句が継げなかった。

末治の屈折した、陰険で狡猾(こうかつ)な一面を物語るエピソードがある。末治がまだ小学生だった頃、急な増水で川の中州に取り残された年寄りが、岸辺を通り掛かった末治少年に助けを呼んできてくれと頼んだとき、「なんぼくれるん？」と訊(き)いたというのだ。

そんな性格だから、親しい友人も出来にくく、末治はいつも孤独だった。ことに、中学を卒業して、自分より頭の悪い連中が高校へ進むのを、指を銜(くわ)えて傍観しなければならなかったのが、彼をますます人嫌いに追いやった。

復興途上にあるとはいえ、日本はまだ貧しく、就職難の時代であった。末治の祖父と父親は地元の林業に従事していたが、息子を上の学校に行かせるほどの収入があるわけでは

ない。中学を出ると、末治は名古屋の会社に就職したが、長つづきせず、いくつかの勤め先を転々としたあげく、家に舞い戻った。何かよほどいやなことでもあったのか、末治は「おれはもう、余所(よそ)へは行かん」とだけ言った。

末治が二十三歳の頃、名神高速道路の建設が始まって、工事事務所に仕事の口が見つかった。末治も今度は腹を決めたのか、順調に勤めがつづくように思えた。勤めて一年ほどすると、勤め先の関係で恋愛結婚をした。そう美人ではないが、気立てのいい嫁で、家族にも気に入られた。

もっとも、末治の「変人」ぶりが完全に収まったというわけではなかった。近所付き合いは以前よりも悪くなって、町の寄合などには出ようとしない。野元家は集落を少し外れたところにぽつんと建っているが、その距離以上に離れたところに、末治の心はあったようだ。

末治の死に対して、人々が比較的冷淡だったのは、そういう背景があったからだが、末治の妻が自殺した時はさすがに寝覚めの悪い想(おも)いだったにちがいない。

末治の死を警察が事故死と断定してからも、末治の妻だけは、そんなはずはないと否定し続けていた。「あの人は殺されたんや」と言い張るのである。この反発には、警察も手を焼いた。

死因は落下した鳥居の石材によって、頭蓋(ずがい)が破壊されたためであることははっきりしているのだが、じつは警察としても、多少はひっかかるものを感じていないではなかった。

末治の着衣に、見ようによっては、何者かと争ったと思えないこともない乱れがあったのと、現場の地面に末治のものとは異なる足跡があったのである。

しかし、それらはいずれも、野元末治の死に何者かが介在したことを示す、決定的な要因とはなりにくいものであった。警察当局にしてみれば、何にも増して、鳥居の一撃がまぎれもない死因であることが、「事故死」説の根幹を成しているのだし、末治の妻の主張を入れる余地はすでになかった。

末治の死から三月後、妻は野洲川に身を投げて死んだ。末治がカニをとっていたという場所からほんの少し遡ったところにある、通称「カニが淵」と呼ばれる滝壷のような深い淀みの底に、彼女の死体が沈んでいた。袂や懐には河原の石が詰められ、覚悟の自殺であることを思わせた。

自宅の末治の遺影の前に残された遺書には、具体的な自殺の理由は何も書いてなかったが、末治に与えられた不当な侮蔑に対して、死をもって抗議しようとしたことは確かだ。なぜなら、遺書にはただ一文字「怨」とだけ書かれてあったからである。

第一章　流され皇女(みこ)の陵(はか)

1

久米美佐子のところに役場から自宅待機通知が届いたのは、京都の下宿を引き上げる前日のことである。

謹啓　ますますご清栄のこととお慶(よろこ)び申し上げます。さて、当町新年度人事といたしまして、あなた様をご採用申し上げる予定になっておりましたところ、当方の都合により、しばらくのあいだご自宅にて待機されたく、右お願い申し上げます。

平成×年三月十日

滋賀県甲賀(こうか)郡水口(みなくち)町役場総務課

いとも事務的で、まるで三下り半のように簡単明瞭(めいりょう)、あっさりした内容であった。

「何なのよ、これ。どういうこと？……」

美佐子は呆(あき)れて、手にした通知書に向かって、思わず毒づいてしまった。

大学を出たら地元に戻って、役場に就職するというのが、一年も前からいまのいままでの美佐子の予定であった。いや、町だってそれを保証してくれていたのだ。だからこそ、ほかのどこにも就職活動をしなかったのではないか。

（冗談じゃないわ――）

頭にきて、すぐに役場に電話しようと思ったら、その日は土曜日。そうだった、明日の日曜日に父親が軽トラックを運転して荷物を運びに来てくれる手筈になっていた。

その父親の良治も、元来が短絡的な性格だから、美佐子以上に怒った。

「そんなあほなことがあるかい」

ハンドルを握りながら、目の前をのんびり走るトラックの後部に突っ込みそうな勢いで、怒鳴った。

「あの町長め、うちのお蔭で当選させてやったようなもんなのに」

息巻いて言うが、さすがにそれはどうかな――と美佐子は疑った。小なりとはいえ、水口町の人口は二万七千あまりもある。両親のたった二票ばかりで、町長選挙の行方が左右されるとも思えない。

「役場にもそれなりの事情があるのよ。とにかく、明日になったら役場へ行って、事情を聞いてみるわ」

父親の憤慨と反比例して、なんとなく美佐子の怒りは冷めてしまった。美佐子にはそんなふうに、物事に拘泥しつづけることが苦手なところがある。ちょっとややこしくなると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com